【後日談】Ep01：牢獄にて――胡蝶之夢

――じゅるじゅる、グチュグチュ。

湿って粘りつく淫猥な音と、生臭く甘ったるい、むせかえるようなニオイ。四方八方から押し寄せる、快感という毒の波濤。肌を這いずり回る、たくさんの、虫、虫、蟲……。

生温かくブヨブヨしたゼラチン質な肉塊が、いくつもいくつも私の肌にへばりつき、ぐねぐねと身を捩らせながら、触手を伸ばして、あらゆる部位を刺激する。どんな刺激もすべて快感へと変えてしまう、媚薬成分が過剰に配合された糸ひく粘液をなすりつけながら。

ああ、ああ……。

キモチイイ。

キモチイイ。

もっと、欲しい。

キモチイイのが、もっと。

ここに閉じ込められてから。この蟲の牢獄に……、私と『この子たち』の愛の巣に籠るようになってから、どれくらい経ったのか。正直、私にはもう何もわからない。

時々現れては、楽しそうに私の身体を貪っていくあの女性も、私には何も考える必要などないと言うばかりで。あの声を聴くと、不思議とそれが自然なことなんだと思えてしまう。
時折、こんな風にぼんやりと思考することはあるけれど、この時間もどうせ長くは続かない。……だって。
ぐじゅり、と粘ついた水音がして、思考は霧散する。

ああ、キた……っ！

今日はいつものようにさんざん全身を舐めしゃぶられて、だけど肝心な場所は誰ひとり可愛がってくれないまま、今までずっと焦らされに焦らされ続けて。
すっかり熟れてトロトロに蕩けてしまっていた秘部の入口に。やっと待ち望んだ……、切望していた、柔らかくねっとりとした肉塊がへばりついてきてくれて。
その感触を享受しただけで、もう私の思考など粉々に砕け散ってしまった。
秘部全体をみっちりと覆ったそのブヨブヨの身体が、うぞうぞと身を蠕動させる。

あ、あ。
クる……っ！

あの動き……精液を吐き出す直前の、ペニスの脈動そのもの。
あ、と思った瞬間。入口にべっとり張り付いたまま、『彼』は私の膣内に向けて、たっぷりとその熱く

粘る雄のエキスを放出してくれた。
どろぉ……っと、まるで半固形物のような重さで、私の中を侵してくる粘液。淫虫の媚薬精液。膣壁にねっとりへばりつきながら、快楽物質を浸透させ、ドロドロぐちゅぐちゅ、子宮へと向かって流し込まれる。
入口は『彼』にずっとまとわりつかれて舐めしゃぶられたままで、注ぎ込まれた媚薬精液は逆流することも許されず、じわりじわりと奥に向かって侵攻していく。まるで彼ら自身の動きそのもののような、焦れったくゆったりとしたその流動に、さんざん開発されきった私の膣壁は、もはや為す術もなく陥落するほかなかった。
深いピストンや、Gスポットへの刺激もなく、ただ中出しされただけで……、精液に犯されて、あっけなく絶頂する。

蟲の精液に膣内を犯される感触。
一匹の雌へと、完全に堕とされる感覚。
彼らからの『愛情』を、この身の最奥で受け入れる歓喜。

ああ……。
シアワセ。

ぞくぞくと腹の底から押し寄せてくる喜悦に、全身が震える。それが快感からなのか、『愛』を甘受する喜びからなのか。

――もう、どうでもよかった。

『キモチイイ』を与えてくれるこの子たちが、ただ愛しくて愛しくて。必死に舌を伸ばして、その粘つく肉塊を舐めしゃぶる。そうすれば、舌が触れた『彼』はとっても喜んで、私のために『キモチイイ』を増幅させるためのエキスを……、彼の、精液を、たっぷりと与えてくれる。飲ませてくれる。しゃぶらせてくれる。

舌で絡み合う私たちふたりに嫉妬したのか、他の子たちもどんどん私の唇に迫ってきて、だけど私の口の大きさではたくさんの子たちと一度に愛し合うことなんてできなくて。それがもどかしくて、私は全身を彼らに向けて開放する。

私の身体すべて。
全部を使って。
ぜんぶで、愛して。

私の想いが、愛が伝わったのか、彼らは一気に……まるで連動するかのように、その身を震わせた。

――びゅる、びちゃ、ぶちゅ、ぐちゃぁ……っ。

そこかしこで、粘液の弾ける音がする。熱く粘つく白濁が、全身に降り注ぐ。彼らの愛の迸りを、

全身で感じる。私のために、私を愛するために、彼らが射精してくれている。

ああ……。

シアワセ。

もう、これしか頭に浮かばない。

なのになぜか、目頭が熱くなる。滲む涙は、この境遇の『何』に反応してなのか。

……それを考えることは、放棄した。

だって、シアワセなんだから、もうそれでいい。

滲んだ涙が頬に伝った後、私が知覚できたのは、彼らが私を愛してくれるその感触と、部屋いっぱいに響く私自身の甘い嬌声。

――それだけだった。

後日談Ep01：End